論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	真志田 祐理子

論文審査担当者		職　位　・学　位	氏　名	印
	主　査	慶應義塾大学健康マネジメント研究科 教授　（博士（看護学））	永田　智子	
	副　査	慶應義塾大学健康マネジメント研究科 教授　（博士（看護学））	矢ヶ崎　香	
	副　査	慶應義塾大学健康マネジメント研究科 教授　（博士（国際公共政策）	堀田　聰子	
	副　査	慶應義塾大学健康マネジメント研究科 教授　（博士（看護学））	深堀　浩樹	

（論文審査の要旨）

真志田祐理子君は『多様なケア環境での老年看護実践に関する研究』の題名にて以下の研究を行った。

【背景と目的】

博士論文の第１章に該当する。超高齢社会の到来とともにAging in Placeの考え方が広まり、高齢者が可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることが出来るための地域包括ケアシステムの構築が進められている。一方、高齢者はその人ならではの生活歴や加齢により変化を経験していることから個人差が大きく、健康上の課題も多様に展開する。よって、多様な健康状態にある高齢者とケア環境を対象とするため、老年看護に求められるニーズは多様で複雑化してきている。老年看護の需要が高まる中、老人専門看護師などの高度実践看護師の数も増えてきた。しかし、多くの看護職はジェネラリストとして高齢者ケアに携わっており、高齢者の状態像の把握の複雑さから高齢者への看護に困難さを抱くことは多い。様々な健康状態にある高齢者が生活の質を低下させることなく生活を継続させるためには、切れ目のない支援体制を整備するとともに、それぞれのケア環境において高齢者の特性を踏まえた看護実践能力を高める必要がある。そこで本論文では、入院治療、外来通院、高齢者向け住まいの３つのケア環境に焦点を当て、それぞれの場における高齢者のニーズと求められる看護を明らかにし、多様なケア環境で求められる老年看護の課題を考察することとした。

【急性期病院でクリニカルパスを使用する中で実践される老年看護に関する研究】

博士論文の第２章に該当する。医療技術の進歩とともに手術を受ける高齢者が増加し、急性期病院では急性期看護の専門知識と高齢者の特性を踏まえた老年看護の融合が推進されるようになってきた。本章では、入院・治療の場である消化器外科病棟で普及するクリニカルパスの高齢者への使用に着目し、看護師がクリニカルパスを使用する中で高齢者の特性を踏まえて行う看護実践の特徴について明らかにした。１大学病院で看護師経験年数５年以上のクリニカルパス使用経験者を対象とし、９名の看護師に対して平均81.7分のインタビューを行い、質的内容分析を用いて分析を行った。その結果、高齢者にパスを使用する利点と困難さに関する２つのカテゴリーと、パスを使用するうえで高齢者の特性を踏まえて実施している看護実践として４カテゴリーが得られた。看護師はクリニカルパスによる高齢者の特性を踏まえた看護実践の困難さを感じ、一部の看護師はクリニカルパスにとらわれず経験に基づいた臨床判断を重視し看護を行っていることが明らかとなった。しかし、経験に浅い看護師や高齢者への関心が低い看護師では、多忙な業務の中で高齢者の特性を踏まえた看護実践を行うことに消極的になる人もおり、看護師個人の経験や努力だけで高齢者の特性を踏まえた看護実践を行うことに限界が生じる可能性が示唆された。急性期病院での老年看護の専門性を高めるための組織的な教育や高齢者の特性を踏まえたツール開発が求められるとの結論に達した。

論 文 審 査 の 要 旨

No.2

第2章の研究成果は、以下の論文として掲載済みである。
真志田祐理子，深堀浩樹．消化器外科病棟で手術を受ける後期高齢者にクリニカルパスを使用する中での看護実践：質的内容分析．日本看護管理学会誌，24(1)，220-231，2020

【外来通院の場における高齢者の満たされないニーズへの働きかけに関する研究】
本論文の第3章に該当する。本章では急性期治療を終え、外来通院をしながら自宅で生活を送る高齢者に焦点を当てる。食・排泄、移動に影響を受けやすい大腸切除術を受けた高齢者の長期的な生活体験に着目し、術後の回復をたどる中での高齢者の生活の変化とその対応について明らかにすることを目的とした。地域がん診療連携拠点病院1施設に外来通院する大腸切除術後1年以上経つ75歳以上の9名を対象としてインタビュー調査を行い、質的内容分析を実施した。分析を行う中で時期による変化が見られたため、術後期、回復・適応期、維持期の3つに分けて、各時期における生活の変化とそれに対する対応を整理した。その結果、高齢者は特に回復・適応の時期に入ると、手術の影響だけではなく老化や並存疾患の状況、周囲のサポート状況などが生活の変化に影響し、星人よりも多様な生活の変化を認識し、その対応にも多様性があることが示唆された。また術後の経過が順調に見える高齢者であっても何らかの生活の変化が生じ、自ら情報収集し変化に適応する高齢者や、医療者に頼れず一人でもがく高齢者もいた。生活上の課題や葛藤は短時間の診療場面では高齢者自身から語られにくい。外来の場では高齢者が語らない背景にある状況を予測しながら、身体的変化だけでなく心理、社会、スピリチュアルな側面も含め生活全体を多面的にとらえる視点が重要となる。個々の高齢者の特徴や理解度に応じて有益な情報提供ができる多面的な支援体制を構築する必要性が示唆された。
第3章の研究成果は以下の論文として掲載済みである。
真志田祐理子，深堀浩樹，太田喜久子．大腸切除術後に老いを生きる後期高齢者の生活の変化とその対応．日本看護科学会誌，29，278-287，2020

【高齢者向け住まい入居者が利用する訪問看護サービスの特徴に関する概要】
本論文の第4章に該当する。本章では近年急増する高齢者向け住まいに焦点を当てる。近年、高齢者向け住まいでは多様な健康レベルに応じたヘルスケアニーズへの対応が求められるようになり、訪問看護サービスの利用ニーズが高まってきた。効果的な支援を検討するためには利用ニーズに応じた対策を検討する必要があるが、わが国の高齢者向け住まいで提供される訪問看護サービスの特徴についてはあまり言及されてこなかった。そこで厚生労働省老人保健健康増進等事業で2017年に実施された全国調査「高齢者施設等と訪問看護事業所との連携の実態及び看護の提供に関する調査研究事業」のデータの二次分析を行った。高齢者施設等に訪問している823事業所から得られた1027件の高齢者向け住まい居住者への訪問看護実践に関するデータを用い、潜在クラス分析を用いて探索的にサービスを類型化し、高齢者向け住まいでの訪問看護の利用パターンを検討した。その結果、訪問看護サービスの提供タイプは5つに分類された。さらにロジスティック回帰分析により、各提供タイプがどのような特性を持つ高齢者に提供されているのかを明らかにした。それにより、5つの提供タイプはEnd-of-lifeケア、疾病管理、ADLケア、リハビリテーションケア、フォローアップケアと位置づけられた。本分析により、高齢者向け住まいでは、入居者に質の高い看護を提供するために、訪問看護サービスが活用されていることが示唆された。
第4章の研究成果は"Patterns of Visiting Nursing Service for Older Adults in Japanese Residential Facilities: A Latent Class Analysis" として今後投稿予定であることが報告された。

【研究の総括と今後への展望】
本論文の第5章に該当する。本論文では3つのケア環境を通して高齢者のニーズに対応する看護の実態を明らかにした。病院看護では高齢者の非定型的で多様な特性に対応する努力が見られたが、高齢者のニーズに対応しきれず潜在化するニーズを見落としやすい現状が明らかとなった。高齢者向け住まいでは訪問看護の活用が多様なヘルスケアニーズへの対応に寄与していた。多様な場での Age-friendly care の実

論 文 審 査 の 要 旨

No.

践に向け、高齢者の特性理解や支援の基盤となる老年看護の知識・技術の浸透、老年学と各専門領域の協働推進、各ケア環境での課題解決を図る体制整備が求められるとして締め括った。

【評価と課題】

本研究では、老年看護の主要な場である病棟、外来、高齢者向け住まいを取り上げ、それぞれの場における看護実践への課題を明らかにした点で価値があると考えられた。審査会での主な質疑およびコメントは以下の通りである。

クリニカルパスを用いた高齢者への看護実践に関しては、今後の課題について再度の確認が行われた。それに対し、高齢者向けのパスが一般化されていないことから、CGA の結果などを踏まえた高齢者向けの新たなパスを開発していくとともに、高齢者看護の実践能力の向上も必要との解答があった。また、「高齢者の特性を踏まえた」という表現の具体的な内容についての質問があり、高齢者の生活リズムや感覚機能などを踏まえた働きかけについての語りがあったとの回答があった。さらに、組織的な教育が必要と記載されている点で具体的な内容は何かとの質問があり、海外で実施されている教育プログラムの応用などについての回答があった。

外来通院の場における高齢者の満たされないニーズへの働きかけについての研究では、既発表の論文とはタイトルが異なっており、実際の内容も後期高齢者を対象としており齟齬があるとの指摘に対し、結果の一部から看護師による働きかけへの示唆が見られるとの回答があった。変化の時期を 3 つに分けた経緯について確認が行われ、分析していく中で 3 つの時期に分けることが妥当と考えられたとの回答があった。また、対象の特性から見て長い場合は 10 年もの期間を振り返っての回答が可能だったのかとの質問があり、認知機能の低下していない対象に限定したこと、本人の認識を問うということで想起される範囲での回答で問題ないと判断したことが回答された。さらに結果を踏まえて外来通院中の高齢者に対して誰がどのようにかかわるべきと考えるかとの問いがあり、外来看護師も多忙な中でも高齢者から思いを引き出すための声かけは可能と考えるとの回答があった。なお、看護師による働きかけについては示唆の記述にとどまるため、タイトルを既発表の論文と同じ「大腸切除術後に老いを生きる後期高齢者の生活の変化とその対応」に修正する方が妥当ではないかと指摘され、検討することとなった。

高齢者向け住まい入居者が利用する訪問看護サービスの特徴についての研究に対しては、サンプルが非終末期と終末期の対象者を対象としている点でサンプルの代表性についての確認が行われ、一定の代表制はあると考えられ、また非終末期の対象者だけで分析をしても同様の結果が得られたとの回答があった。また利用パターンを記述することの意義について質問があり、高齢者向け住まいのみならず自宅で生活する高齢者に対するケアの類型化にもつながるとの回答があった。さらに本研究ではアウトカムまでは明らかにはなっていないと思われるので考察で書きすぎないように修正すべきとの指摘があった。

全体を通して、全体を通しての考察と 3 つの論文の一貫性について分かりにくいとの指摘があった。それについて、3 つのケア環境に着目して課題を整理したとの回答があった。また、全体に方法についての記載が不十分で、考察についてはやや飛躍が見られるとの指摘がされた。

【審査結果】

本研究の中で最初の 2 つの論文は既に公表されており、リポジトリ掲載との関係で加筆修正は難しいことが確認された。3 章は内容との整合性を考慮した結果、既発表の論文と同じタイトルが望ましいとの結論になった。4 章の高齢者向け住まいについての研究は未発表のものであるため、考察については審査結果を踏まえて修正することとなった。さらに序論で全体を通しての研究目的と 3 論文の関係性を丁寧に記述する修正を行うこととした。これを踏まえ 5 月 14 日に修正論文が提出され、さらに指摘に応じて 6 月 17 日に再修正論文が提出され、主査・副査により適切に修正されていることを確認した。

本論文は看護学において価値ある研究と考えられ、また審査会での質疑応答およびその後の論文修正の対応も適切であったことから、審査会においては全員一致して真志田祐理子氏に博士（看護学）の学位を授与するのが妥当と判断した。